



南町小だより

平成29年10月31日

つよく かしく あたたかく

校長 福田 俊彦

心遣いから

校長 福田 俊彦

「よく降りますね。」という言葉が枕詞のような10月が終わろうとしています。その天候の中でも、校庭の東側に並ぶ13本のみかんの木には、色付き始めた形も大きさも違うみかんと多く見ることができるようになりました。季節の移り変わりを受け、その姿を成長という形で見せているようにも思います。

さて、傘を差していて思うことがあります。歩道でのことです。すれ違う時の傘の位置です。傘と傘がぶつかっているのを見ました。通勤時など、多くの人が行き交う中では当然のことでしょうか。しかし、その時は、人通りも多くない時間帯でした。近年、そのような場を見ることが多くなったようにも思います。だれもがわざとのようにしているとは思いませんが、気になります。そのようなことを原因として、大きな事に発展してしまったという話を聞いたこともあります。何か心配なことです。そのように感じている人は、他にもいらっしゃるのではないのでしょうか。

その昔、日本の道が狭いところから生まれた文化があるということを知りました。生活が人の行動様式を創っていくこと、よりよい生活を人と人との関わりの中で創っていくこと、傘を差しすれ違う時の姿にそれが見えます。傘をそっとすれ違う人とは反対の方に傾けるということです。このことは、傘だけのことだけではないでしょう。人と人が生活する中、お互いのちょっとした心遣いの積み重ねがよりよい生活を創っていきます。

私は、他の場面でも、多くの心遣いを見てきました。そして、その場に居合わせているだけで心が温かくなります。バスの乗り降りでも、「段差に気を付けてくださいね。」と、高齢の方に声を掛けている人の姿がありました。白杖を持っている方とすれ違う時に、道を空けている人の姿がありました。以前にも学校だよりでお知らせをしましたが、美術館での車椅子を使う方の移動に配慮した場所に立ち動いている人たちの姿がありました。ちょっとしたその人の姿に心遣いが見えることは、たくさんあることは間違いないことです。そして、その心遣いの形は、時代の変化とともに変わっていきます。ある方の話です。エスカレーターの場面を想起してみてください。近隣ではエスカレーターの左側に立つことが当たり前になっています。しかし、左手の不自由な方にとってそれはという話でした。当たり前とされていることが、それが当たり前ではない方がいることを少しでも考えていたかなと思ってしまったのです。きっとその方は不安定な状態でエスカレーターに乗り、怖い思いをされているのではないかと。それならエスカレーターには乗らないと。

私たちは、社会での生活を通して、互いの立場や心を思いやる行動を身に付けていきます。子供たちは、その社会の姿を見つつ多様な場面での心遣いを身に付けていくでしょう。みんなの子供である子供たちを今後も宜しく願います。